

Fantascope ~tylostoma~

流麗な筆致の墨絵が揺れて流れる 幻想的で妖艶な天野喜孝ワールド

1799年、ベルギーのロベールソノは、ガラス板に描かれた絵に光を当てスクリーンに投射する移動式幻灯機ファンタスコープを用いて、死者や亡霊が登場する見せ物を僧院の废墟で上映した。それから2世紀余り、アナログな手描きの墨絵とデジタルな編集技術・メディアによって、ファンタスコープが甦った。

ファンタジーイラストの第一人者として知られる天野喜孝が、以前から描きたかったという世界を存分に描出しきったのが、この『Fantascope ~tylostoma~』である。

本作の冒頭には天野喜孝自身が登場する。彼が慈しむように掌に包んでいる巻き貝。その学名

をタイロストーマという。やがて動きだす天野の絵筆に誘われ、物語——天野の内的世界——が始まる。墨絵という東洋的な幽玄の世界に繰り広げられるのは、男と女、生者と死者の邂逅であり、能にも通ずる世界である。

もちろんこの物語のモチーフは東洋にだけ求められるものではない。

というのも本作が、嵐の海で神を誹謗した罪で死ぬことを許されず永遠に海をさまよひ続けるオランダ人船長の運命を描いたワグナーのオペラ『さまよえるオランダ人』（原題は『幽霊船』）を想起させるからだ。

7年に1度だけ上陸を許され、その間に彼に永



遠の愛をさげざる女性を見つけない限り、再び海に戻らねばならない男の物語。この妖艶で残酷な世界観が、本作の底流にある。

天野のイラストが世界中にファンを獲得している理由のひとつが、オリエンタリズムと西洋的デカダンの融合なのだ。こうした天野独特の画と発想が起点となり、C M界で活躍する木村草一への演出を得たのが、『Fantascope ~tylostoma~』である。個性豊かな作家同士のコラボレーションも、『画ニメ』だからこそ実現できたもの。

「世界を滅ぼしたのは私よ。女神に潜む狂気の愛を軸にすえ、際限のない愛憎の輪廻を紡ぎ出したのは、木村草一演出のなせるところだ。

元タツノコプロの社員としてアニメーションに取り組むことで創作活動をスタートした天野が、今回の画ニメで再び映像に戻ってきた際には、映像表現への飽くなき憧れがある。今年6月にフランスの

アヌシー国際アニメーション映画祭で開催された講演会でも、わざわざ本作の上映を行ったほどだ。

本作における天野喜孝は、原作・作画となっているが、現在制作中の画ニメ作品『鳥の歌(仮題)』では作画のみならず監督も務めるという。天野がそこまで画ニメに入れ込ませるのは、「このやり方なら自分の絵をそのまま映像にできる」という理由からである。

アニメーションから始めたキャリアを、舞台美術や海外での個展などファイン・アートの世界へ広げた天野喜孝だが、画ニメという映像作品を通して今後どのようなアーティストになるのか、『Fantascope ~tylostoma~』はそのマルチタレントとなるに違いない。

